ハト目ハト科

# カラスバト

*Columba janthina janthina* Temminck, 1830

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

タブノキなど常緑広葉樹の林を中心に生息するが、そのような環境は限られている。また、生息数も少なく、繁殖地も限られている。隠岐諸島は、日本海側における数少ない生息地であるが、生息数も多くないことなどから、絶滅が危惧される。

【概要】

ハト科中最大の大きさを誇るカラスバトは種カラスバトの基亜種で、国内では伊豆諸島、本州の温暖部と九州の海岸部およびその周辺の島嶼、沖縄諸島などに分布する。国の天然記念物。国外では韓国南部の海岸や島嶼に生息しており、鬱陵島では郡の鳥に指定されている。キジバトより大型で、全身が紫や緑色の金属光沢のある黒色を呈す。スダジイやタブノキ、ヤブツバキなどからなるよく繁った常緑広葉樹林に生息し、地上や樹上で餌を採る。おもな餌はタブノキやクロガネモチなど果肉のある果実のほか、ヤブツバキやスダジイの堅果など。繁殖期にはつがいで生息し、大木の枝や樹洞に小枝を積み重ねた浅い皿形の粗雑な巣を作り１個の卵を産む。「ウッウゥーウゥ ウッウーウ」と大きく奇妙な太い声で鳴き、ウシの声を連想させることからウシバトと呼ばれることもある。なお、小笠原諸島にはアカガシラカラスバト、先島諸島にはヨナクニカラスバトと呼ばれる別亜種が生息している。

【県内での生息地域・生息環境】

本県で確実に繁殖しているのは隠岐諸島のみで、島後や西ノ島などの大きな島のほか、大波加島や大森島などの無人島にも生息する。隠岐諸島以外では、高島で確認されているほか、島根半島などでもまれに観察されることがある。生息地は、照葉樹などが生い茂った比較的人の出入りが少ない森林。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発行為など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | 島嶼 |
| △ | | ○ | ◎ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | | | | ◎ |

ミズナギドリ目ウミツバメ科

# ヒメクロウミツバメ

*Oceanodroma monorhis*（Swinhoe, 1867）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

県内で繁殖が確認されているのは隠岐諸島のみであり、生息数も少ないことから、存続基盤はきわめて脆弱である。

【概要】

全長17－20cmの小型の海鳥。全体に黒褐色で、腰に白色部はない。翼はウミツバメ類としては短めで、上面は大雨覆が淡色のため、その部分が淡い帯状に見える。初列風切基部の羽軸は白いが、野外での確認は難しい。日本のほかロシア極東部、韓国、中国沿岸の無人島などで繁殖している。国内には夏鳥として渡来し、青森県、岩手県、石川県、京都府、福岡県などの島嶼で繁殖している。繁殖地では、夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。岩の隙間や土中に穴を掘って営巣するほか、オオミズナギドリの古巣などを利用して繁殖する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島では、昭和28年および29年に成鳥と雛が採集され、本種の繁殖が明らかになったが、その後はわずかな目撃情報のみであった。現在は、2005年に環境省自然環境局生物多様性センターのモニタリングサイト1000海鳥調査において、無人島の１つで繁殖していることが改めて確認された。また、同調査は2010年にも実施されており、この時の調査では島全域の飛来数は不明としながらも、調査時の状況から100羽以上の規模と報告している。繁殖が確認されている島では、現在のところ本種の繁殖地存続の脅威となるネズミ類の生息は確認されていないが、一旦侵入した場合の影響は計り知れず、船舶の接岸時にネズミ類を持ち込まない注意喚起などを含め、十分な配慮と見守りが必要である。

【存続を脅かす原因】

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 海上 | 島嶼 |
| △ | | | ◎ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ◎ |

ペリカン目サギ科

# ヨシゴイ

*Ixobrychus sinensis sinensis*（Gmelin, 1789）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は、大河川の河口部などにある広大なヨシ原や草原が、人為的な改変により急激に減少してきたことや、中継渡来地の環境悪化などにより、近年渡来数が激減している。

【概要】

日本産のサギ類中でもっとも小型で、全長36cm内外。夏鳥として５月中旬から下旬頃に渡来し、大河川の河口部に広がるヨシ原や、マコモ、ガマなどの繁った湿地の草原に生息する。常にヨシ原などの中に潜み、見通しのよいところに現れることはほとんどない。移動する時は、ヨシ原の上空をすれすれに飛ぶ。夕暮れや夜明け頃によく活動し、じっと立ち止まり待ち伏せして、魚類やカエルなどを捕食する。繁殖期には、「ウー ウー ウー」とうめくように連続して鳴く。５～８月に水辺にあるヨシやマコモの草原に営巣し、５～６個の卵を産む。18日前後で孵化し、約３週間で巣立つ。外敵が近づくと、頸をピンと伸ばして正面を向き動かなくなるといった擬態をとることでよく知られている。

【県内での生息地域・生息環境】

以前は、斐伊川や神戸川など大河川の河口部や、隠岐諸島などに渡来し繁殖していた。築地松が点在する斐伊川河口部の水田地帯では、昭和30年代まで竹藪や潅木などに普通に営巣していたようである。斐伊川河口部のヨシ原では、40年ほど前まで比較的普通に見られ繁殖もしていたが、近年激減し姿を見る機会はきわめて少なくなった。

【存続を脅かす原因】

河口部や沼沢地に広がっていた広大なヨシ原の消失や湿地の改変、東南アジアなど越冬地における生息環境の悪化、中継渡来地における環境の悪化など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | △ | ○ | ○ | | | | | ○ | |

ペリカン目サギ科

# オオヨシゴイ

*Ixobrychus eurhythmus*（Swinhoe, 1873）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）**

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

【選定理由】

本種はヨシゴイと同様に、大河川の河口部などにある広大なヨシ原や草原が、人為的な改変により急激に減少してきたことや、中継渡来地の環境悪化などにより、近年渡来数が激減している。

【概要】

ヨシゴイより一回り大きい全長39 cmほどの小型のサギ類。オスは頭が黒褐色で、背中は黒っぽい栗褐色。喉から胸にかけて一本の細い縦じまがある。夏鳥として３～４月ごろ渡来し、主として北海道や本州中部以北などで繁殖する。ヨシ原や水草の繁茂した中に潜み、草の間の地上や水中を歩いて活動する。夕暮れ時や夜明け頃によく活動し、魚やカエル、エビ類などを餌としている。繁殖期には「ウォー ウォー ウォー」とある間隔をおいてうめくように連続して鳴く。ヨシやマコモが生育する水辺の草原の上に、茎や葉を束ねて24～30cmの粗末な皿型の巣を作り、５～７月に純白色の卵を５～６個産む。抱卵中に外敵が接近した時などには、頭と頸部を上方に細長く伸ばし、嘴を空に向け静止し擬態する。冬季は、フィリピンなど東南アジアに渡る。

【県内での生息地域・生息環境】

斐伊川河口部や隠岐諸島などに渡来し繁殖していたが、ヨシ原などの消失に伴い急速に生息数が減少している。斐伊川の河口部では、40年ほど前まで比較的普通に見られ繁殖もしていたが、近年は観察情報がほとんどなく、確実な繁殖記録も見あたらない。

【存続を脅かす原因】

河口部や沼沢地に広がっていた広大なヨシ原の消失や湿地の改変、東南アジアなど越冬地における生息環境の悪化、中継渡来地における環境の悪化など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | | △ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | ○ | |

チドリ目ウミスズメ科

# カンムリウミスズメ

*Synthliboramphus wumizusume*（Temminck, 1836）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

確実な繁殖地は隠岐諸島のみで、生息数も多くはないと考えられ、本種の存続基盤はきわめて脆弱である。また、冬鳥としても県下の日本海域に回遊するが、その実態などは不明であり、併せて情報収集を行っていく必要がある。

【概要】

全長24－27cm。夏羽は頭頂に黒く細長い冠羽がある。日本近海で繁殖し、宮崎県の枇榔島、伊豆諸島の三宅島や鳥島、福岡県の沖ノ島や小屋島などが集団繁殖地として知られている。冬季、ウミスズメなどに混じって県内の沿岸海上などに姿を見せることもある。潜水し、魚類や甲殻類を捕食する。国の天然記念物。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島では1969年に採集された卵標本の存在や、1995年に同島で鳴き声が確認されたことなどから、その生息や繁殖の可能性が示唆されてきたが、近年における確実な繁殖については確認されていなかった。現在は、2010年に環境省自然環境局生物多様性センターのモニタリングサイト1000海鳥調査において無人島の１つで繁殖が確認され、その後の島根県の調査でも繁殖していることなどが確認されている。他の隠岐諸島の島嶼でも、夜間に周辺海上に本種が集まっている様子が観察されており、繁殖の可能性が高いものの確認には至っていない。繁殖が確認されている島以外は、本種の繁殖の脅威となるネズミ類の生息情報があることから、仮に繁殖していたとしても、その数は多くはないと考えられる。海上では、益田市の沖合でも観察されているほか、隠岐航路でもまれに確認される。

【存続を脅かす原因】

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食のほか、油の流出、海洋汚染、魚網への絡まりなど。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 海上 | 島嶼 |
| △ | △ | ○ | ◎ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ◎ |

タカ目タカ科

# ハチクマ

*Pernis ptilorhynchus orientalis* Taczanowski, 1891

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は良好な環境を保つ里山の丘陵帯から山地において、食物連鎖の頂点に立つ猛禽類といえる。県内の生息状況について十分に把握されているわけではないが、個体数は多くない上に、生息適地は減少していると考えられる。

【概要】

種としては、ユーラシア大陸の温帯･亜寒帯で繁殖し、東南アジアやインドに渡って越冬する。国内には本亜種が夏鳥として丘陵地から山地の林に渡来し、５月中旬から10月上旬まで過ごす。全長オス約57cm、メス約61cmと、トビ（全長約60cm）と同じくらいか少し小さい程度の猛禽類で、姿はクマタカに似ているが、本種の方が飛翔時の翼の幅が狭く見える。また、飛翔中、他のタカ類に比べると頸が細長く見える。全体に褐色を主体にした色彩であるが、黒っぽいもの、白っぽいものなど個体による変化が大きい。タカの仲間でありながら蜂を好んで食べるといった特異な習性を持っている。もっとも好んで餌にするのは地バチで、特に小型のクロスズメバチ類の幼虫（蜂の子）であるという報告がある。ほかに、アリ、シロアリなどの昆虫、カエル、ヘビなども捕食することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として渡来し、丘陵地から山地にかけて生息するが、個体数は多くない。1990年に浜田市で雛のいる巣に蜂の巣を運び込む様子が確認されるなど、里山を中心に営巣が確認されている。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少や餌動物の減少などが考えられる。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | |

タカ目タカ科

# オオタカ

*Accipiter gentilis fujiyamae*（Swann et Hartert, 1923）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は里山部における食物連鎖の頂点に立つ大型の猛禽類で、その生息基盤が脆弱である。関東などでは近年生息数が増加し、レッドデータブックのランクが下げられたりしているが、本県においてはそのような状況はみられない。県内で繁殖が確認されている地域は、比較的人の生活圏に近く開発行為が行われやすいことや、松くい虫による営巣木の枯死などにより急速に生息環境が悪化してきている。

【概要】

種オオタカは、ユーラシア大陸および北アメリカ大陸の北部を中心に北半球に広く分布している。本亜種は、本州・四国のほか、北海道から千島列島・サハリンに分布する。オスの全長約50cm、メス約56cmのカラス大の猛禽類で、森林内や森林に接した草地や農地に生息する。おもにハト類などの鳥類を餌としており、まれにノウサギなどの哺乳類も捕食する。アカマツなど針葉樹の太枝の付け根などに、小枝を組み合わせた直径60～70cm、厚さ55cmほどの巣をかける。５月ごろ３～４個の淡青灰色の卵を産み、抱卵日数は35～38日で、おもにメスが抱卵する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、冬に漂行した個体が農耕地や川原などで比較的よく見られる。以前は、夏期にも個体が確認されることなどから、繁殖が確実視されていたが、営巣確認には至っていなかった。近年（2000年頃から）になって、数は多くはないが繁殖が確認されるようになった。繁殖は低山部の森林で行い、営巣木はアカマツが多い。

【存続を脅かす原因】

高速道路や林道整備などの開発行為による生息環境の悪化、近年の松くい虫被害に伴う営巣木として利用するアカマツの枯死など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | △ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | |

タカ目タカ科

# サシバ

*Butastur indicus*（Gmelin, 1788）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

かつては、県内の里山で普通に見られたが、近年渡来数が激減した。人里に近い環境に営巣するため、人為的な改変により影響を受けやすく、タカ類の中ではもっとも減少率が高い種と考えられ、絶滅が危惧される。

【概要】

夏鳥として渡来する中型のタカで、全長約50cm、翼開長110cm。頭部の白色の眉斑が特徴で、本州から九州の低山や丘陵などで繁殖する。アカマツ林に営巣することが多く、巣はアカマツなどの10～20mの枝上に作り、生息環境がよければ毎年同じ巣を補修して連続して使用することが多い。餌場は、水田や畑、伐採跡地などの開けた土地で、谷に水田が入り込んだ地域を特に好む。電柱や木の枝などにとまって、地上にいるヘビやカエル、トカゲ、大型昆虫などを捕食する。「ピックイー」とか「キンミー」と聞こえる独特の鳴き声が特徴。春に南方から渡来し、４月末から５月初めにかけて２～４個の卵を産む。１カ月ほどで雛がかえり、40～45日で巣立つ。10月初旬頃、大群で渡りをする事が知られているが、日本海側では太平洋側のように大きな群れを見ることがないことから、山陰地方で繁殖した個体は、瀬戸内海に抜けて九州に入り、島づたいに東南アジア方面へ渡っていくのではないかと考えられる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内全域の里山に生息し、特に谷あいの入り組んだ水田地域を好む。中には、里山の森林地帯を中心に生息する個体もいる。

【存続を脅かす原因】

里部における森林の開発、松くい虫による営巣木の減少、谷奥部の水田や畑地の放棄、東南アジアなど越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | |

タカ目タカ科

# クマタカ

*Nisaetus nipalensis orientalis*（Temminck et Schlegel, 1844）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵2

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

森林性の大型のタカで、生態系の頂点に立つ種である。生息数が多くない上に、山林の伐採や開発などによる影響が懸念される。また、近年繁殖率の低下も指摘されている。

【概要】

種としては、スリランカ・インド南西部から中国南部・日本にかけて分布する。日本に生息する亜種クマタカは、韓国で観察された情報もあるが、日本が主要な生息地であり、ほぼ日本特産の亜種といえる。国内では、北海道から九州にかけて留鳥として分布し、１年中、同一地域で暮らす。国内の生息数については、最低でも約900ペア（1,800羽）が確認されたという報告がある。生息域の地形的要素としては、大きな谷が重要で、なわばりは普通20㎢前後。餌はノウサギ、テンなどの哺乳類や、アオダイショウ、シマヘビなどの爬虫類、ヤマドリ、キジなど中型以上の鳥類が多い。１～２月頃、求愛行動や巣材運びを行い、３月下旬から４月に産卵する。繁殖は古い巣を直しながら毎年使用することが多く、行動圏内に予備の巣を持つことが知られている。営巣に使用する木は、アカマツやモミなどの針葉樹の大木が多く、幹上部の大枝の分かれ部などに、直径１ｍ以上、厚さ70㎝以上の大きな巣を作る。

【県内での生息地域・生息環境】

ある程度急峻な斜面を持つ谷のある森林地帯が主たる生息域で、平野部と里山低地部を除くほぼ全域に生息している。営巣は、山地の中腹より下部の針葉樹林の大木で行うことが多く、高樹齢の林内や伐採跡地などを餌場とする。

【存続を脅かす原因】

ダムや道路建設などの林地開発、森林伐採、松くい虫、有害化学物質の蓄積による繁殖力の低下など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

# ブッポウソウ

*Eurystomus orientalis calonyx* Sharpe, 1890

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

以前は、県内の山間地で比較的普通に見られたが、近年急激に姿が見られなくなった。営巣木の確保などの保護対策が講じられなければ、絶滅する恐れがある。

【概要】

本亜種は、日本のほか中国東北地方、アムール地方、朝鮮半島に分布する。青緑色の体に赤い嘴を持つ異国情緒の鳥で、夏鳥として渡来する。全長約30㎝で、キジバトより少し小型。野外では全体的に黒っぽく見え、ふわふわと飛ぶことが多いが、急旋回することもある。飛ぶと翼の白い紋がよく目立つ。神社や寺など、大きな樹木のある場所を好む。見晴らしのよい高所に止まり、セミやコガネムシ、トンボなどの昆虫を捕食する。餌を捕らえると、また元の場所に戻る習性を持っている。「ゲッゲッ」と濁った声で鳴く。５月下旬から７月上旬、大木に開けられたキツツキの古巣などを利用して営巣する。３～５個の卵を産み、22～23日で孵化し、その後20～26日ぐらいで巣立ちする。貝殻や缶ジュースの栓などを、巣内に持ち込む変わった習性がある。

【県内での生息地域・生息環境】

近年では、繁殖地は限定された場所に限られてきている。以前は、木の電柱にキツツキなどによって掘られた穴に営巣することが比較的普通に見られたが、木の電柱がコンクリート製にかえられたことなどから激減し、近年急速に姿が見られなくなった。岡山県や鳥取県、広島県などでは、電柱などに人工の巣箱を設置し繁殖場所を確保するなどの保護対策が行われており、本県でも一部の地域で取り組まれている。河川の橋脚にある隙間を利用し、繁殖をしている個体も見られる。

【存続を脅かす原因】

営巣木の消失（特に木製電柱の撤去）、生息環境の悪化など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | △ | ○ | | | | | | | | | | | | | |

ハヤブサ目ハヤブサ科

# ハヤブサ

*Falco peregrinus japonensis* Gmelin, 1788

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

海岸部における生態系の頂点に立つ重要な種であるが、日本全体での推定個体数が700～1,000羽と少ない。県内の海岸部は、北海道や三陸海岸に次ぐ国内有数の繁殖地域である日本海側地域に含まれるが、近年、繁殖地付近への人の立ち入りなどによる生息環境の悪化や、有害化学物質の蓄積などによる繁殖率の低下などが危惧される。

【概要】

種ハヤブサは、ほぼ全世界に分布し、このうち亜種ハヤブサは東アジア北部と日本に分布する。本県には、留鳥として生息し、人の近寄れない海岸や山の断崖の岩棚に営巣する。羽ばたきと滑翔を交互に行い、直線的に高速で飛翔し、ヒヨドリなどの中型の小鳥類を中心に捕食する。飛翔中の鳥の上空から翼をすぼめて急降下し、脚で蹴り落とし捕らえることが多い。繁殖期は３月下旬から４月上旬で、岩だなの平坦部に直接３～４個の卵を産む。約１カ月で雛がかえり、40日ほどで巣立つ。冬季など、非繁殖期には全国各地の海岸や平野部などに漂行し、特に広い水面や平坦地のある環境を好む。本県では、冬季に水田地帯などで漂行してきた個体が比較的よく確認される。

【県内での生息地域・生息環境】

繁殖個体は、切り立った岩場のある海岸部に多く、島根半島や隠岐諸島の海岸部で繁殖地が確認されている。近年になって、内陸部においても繁殖が確認されたが、これはまれなケースである。一方、非繁殖期に漂行する個体は、斐伊川など大河川の河口部や平野部で多く見られ、冬季に個体密度が増加する。

【存続を脅かす原因】

繁殖地付近への釣り人などの立ち入り、有害化学物質の蓄積による繁殖力低下など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | 崖地 |
| ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | | | | ○ | △ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ◎ |

スズメ目ヤイロチョウ科

# ヤイロチョウ

*Pitta nympha* Temminck et Schlegel, 1850

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

まれな夏鳥で、ごく限られた地域でしか繁殖せず生息数も多くない。本種の生息環境は、照葉樹などが生い茂る豊かな自然が残存した傾斜地などであり、このような優れた自然環境の消滅とともに本種の生息基盤が脆弱となっていることが考えられる。

【概要】

本種は、日本、朝鮮半島および中国にかけて繁殖し、中国南部からインドネシア、ボルネオ島にかけての地域で越冬する。全長約18cmのムクドリ大で、嘴が太く尾が短い。脚は比較的長くて丈夫。地上を歩きながらミミズなどを捕食する。餌はミミズが多いが、サワガニや昆虫、多足類なども捕食する。その名のとおり体色に特徴があり、頭上部は茶褐色、黒い頭央線があり、黒くて太い過眼線との間に黄色の眉線がある。背は緑色、腰と肩は光沢のある青色、尾の基部は黒く先端は青、喉から胸は黄白色、腹の中央から下尾筒には鮮やかな赤色の部分がある。翼には白斑があり、飛ぶと目立つ。雌雄同色。近年において生息記録のあった地域は、暖温帯の照葉樹林が発達する地域とほぼ一致し、繁殖が確認された森林は、常緑と落葉の広葉樹およびスギ・ヒノキ植林の混成林が多いとされる。

【県内での生息地域・生息環境】

島根県内における確認例はさほど多くはないが、ほぼ県内全域に及んでいる。龍頭が滝や鰐淵寺周辺など、優れた照葉樹林が残っている斜面部で確認されることが多い。確実な繁殖の記録はほとんどないが、1977年７月に、掛合町で巣立ち後間もない幼鳥が保護されたこともあり、本県内で繁殖していることは明らかである。

【存続を脅かす原因】

伐採などに伴う照葉樹林の消滅、生息地への人の立ち入り、越冬地の環境悪化など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | |

スズメ目センニュウ科

# ウチヤマセンニュウ

*Locustella pleskei* Taczanowski, 1890

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

県内では、本土側の島嶼１カ所で繁殖が確認されているほか、隠岐諸島のいくつかの島嶼で夏季に観察記録がある。日本海に浮かぶ県内の小さな島の一部に渡来・生息しているが、その個体数は非常に少なく、存続基盤はきわめて脆弱である。

【概要】

全長17cm。シマセンニュウによく似ているが、体はやや大きめで嘴が長い。さえずりは、「チッチ チョイチョイチョイ」などと聞こえる鳴き方で、シマセンニュウに似るが、１～２音短い傾向がある。以前は、シマセンニュウの亜種とされていたが、日本鳥類目録改訂第６版（2000）から別種扱いとなった。本種は、ロシア沿海地方や朝鮮半島、日本の沿岸の島嶼で繁殖し、中国南東部やベトナムで越冬する。国内では、夏鳥として渡来し、伊豆諸島のほか紀伊半島周辺や九州近海の小島などで繁殖している。海岸に近いササ藪や草地、照葉樹林などに生息する。分布がきわめて局所的であり、総個体数は少ないと考えられている。

【県内での生息地域・生息環境】

本土側の島嶼１カ所で2008年に繁殖が確認されている。隠岐諸島では、複数の島嶼で夏季に観察記録があり、繁殖の可能性は高いと考えられるが、現在のところ営巣や巣立ち雛などの確認はできていない。いずれの場合も、小さな島の一部にある草原と灌木が混在するような環境に見られるが、このような適度な生息環境が維持されるかなど、今後の動向について注意深く見守っていく必要がある。

【存続を脅かす原因】

植生の遷移や人為的な環境の改変、釣り人の立ち入りなど。

| 生息地域 | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本土側 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | 島嶼 |
| ◎ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | △ | | | ◎ |



スズメ目セキレイ科

# イワミセキレイ

*Dendronanthus indicus*（Gmelin, 1789）

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

1960～70年代には県内で本種の繁殖が継続的に確認され、全国的にもまれな事例として注目されていたが、近年は確認されなくなった。原因究明や広範な情報収集をしていく必要がある。

【概要】

全長16cm。胸に二筋の黒帯があり、他のセキレイ類とは異なり尾を左右に水平に振るのが特徴。地上を歩きながら昆虫やクモ類などを採餌する。地鳴きは「ギーツクギーツク」と聞こえる濁った声を出し、「チュチュピーチュチュピー」という高く澄んだ声でさえずる。本種は、ユーラシア大陸東部の中国中北部で繁殖し、冬は中国南部、東南アジアなどに渡る。中国大陸系の種であり、国内には数少ない旅鳥として記録されることがほとんどであるが、1970年代に福岡県や鳥取県で繁殖が確認されたほか、中部から九州にかけて複数の県で繁殖期にさえずっていた記録があり、他地域においても繁殖の可能性が考えられている。県内では、数カ所で渡来が確認されていたほか、海岸のマツ林で継続的な繁殖が確認され、注目されていた。林の中や林縁、農耕地や草地などに生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

1965年に大社海岸で繁殖が確認されて以来、継続的に繁殖が観察されていたが、海岸マツ林における松くい虫の蔓延や、林内環境の変化、1977年から開始された松くい虫の農薬散布の影響などから確認されなくなった。近年では、渡りの時期に海岸部に近い林などでまれに観察された記録がある。

【存続を脅かす原因】

松くい虫による海岸のマツ林の環境変化、松くい虫防除のための薬剤散布、人の立ち入りなど。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | △ | △ | △ | | | | | | | | | | | | △ | △ | △ | | | | ○ | △ | | | |

スズメ目アトリ科

# コイカル

*Eophona migratoria migratoria* Hartert, 1903

**島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）** 写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）は、浜田市で繁殖が確認されていたが、近年はみられなくなった。また、毎年越冬していた場所においても観察できなくなり、県内の観察記録はきわめて少なくなった。原因の究明や現状の生息情報の収集を行っていく必要がある。

【概要】

全長19cm。イカルに似るが、より小さくて風切と初列雨覆の羽先は白い。雄成鳥の頭部の黒色部はより広い。地鳴きは濁った声で「ギョッ」「キョッ」と鳴き、さえずりはイカルの声に似て「キィーキョ キーコ」などと鳴く。種としては、ロシアのアムール、モンゴル、中国の北東部や中部、朝鮮半島などで繁殖し、冬季は中国南部、台湾、日本などに渡る。国内には、本亜種が旅鳥または冬鳥として渡来し、本州中部以南で比較的多い。1980年に熊本県で繁殖の記録がある。東京でも繁殖例があるが、かご抜けであろうと考えられている。平地から山地の林に生息し、おもに木の実や草の種子などを食べる。本種（亜種）だけの小群で生活するか、イカルの群れに混ざることもある。

【県内での生息地域・生息環境】

1980年代に浜田市において３年間で複数の繁殖個体が観察されていたが、その後は確認されていない。松江市の城山公園では、近年まで少数が越冬していたが、2002年頃から観察されなくなった。その他の記録としては、冬季または渡りの時期の情報があるが少なく、生息の実態がつかめないことから情報の収集と整理が望まれる。

【存続を脅かす原因】

継続的に生息していた場所の環境改変など。

| 生息地域 | | | | 山地地域 | | | | | 里地地域 | | | | | | 平野地域 | | | | | | 海岸地域 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東部 | 中部 | 西部 | 隠岐 | 森林 | 草原 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 森林 | 草原 | 農地 | 河川 | 湖沼 | | 林地 | 草地 | 砂浜 | 河口 | |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |